

専任教員教育研究業績

平成29年 5月 10日記入

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
安村 由希子	やすむらゆきこ	保育学科 通信教育課程	教授・ <input checked="" type="checkbox"/> 准教授・講師・助教	男・ <input checked="" type="checkbox"/> 女

小田原短期大学における担当科目名

「幼児理解の理論と方法」「言葉指導法」

学 歴

和暦（西暦）年 月	事 項	学位
平成10年4月	西南学院大学 文学部 児童教育学科 入学	
平成14年3月	西南学院大学 文学部 児童教育学科 卒業	学士（教育学）
平成14年4月	福岡教育大学 特殊教育特別専攻科 入学	
平成15年3月	福岡教育大学 特殊教育特別専攻科 修了	
平成15年4月	福岡教育大学 教育学研究科 障害児教育専攻 入学	
平成17年3月	福岡教育大学 教育学研究科 障害児教育専攻 修了	修士（教育学）
平成17年4月	国際医療福祉大学 医療福祉学研究科 保健医療学専攻 入学	
平成20年3月	国際医療福祉大学 医療福祉学研究科 保健医療学専攻 博士課程 単位取得後退学	
平成21年3月	博士号取得（保健医療学）	博士（保健医療学）

教 育 歴 ・ 職 歴

名 称	期 間	教育内容又は業務内容
埼玉純真短期大学子ども 学科 助教	平成20年4月～平成24 年3月	特別支援教育」「障害児保育」「保育内容応用指導法」「入門ゼミ」「保育内容人間関係指導法」「教職実践演習」「保育実践演習」「保育実習指導Ⅰ（保育所）」担当
障害者リハビリテーショ ンセンター学院手話通訳 学科（非常勤講師）	平成21年6月～平成21 年7月	「リハビリテーション概論」担当
埼玉純真短期大学子ども 学科 専任講師	平成24年4月～平成27 年9月	「特別支援保育」「保育内容応用指導法」「入門ゼミ」「保育内容人間関係指導法」「教職実践演習」「日本語表現」「保育実習指導Ⅰ（施設）」担当
埼玉純真短期大学子ども 学科 特任講師	平成27年10月～平成28 年3月	「特別支援保育」「保育内容応用指導法」「保育実習指導Ⅰ（施設）」担当
小田原短期大学通信教育 課程	平成28年4月～現在に 至る	「幼児理解の理論と方法」「教育相談」「相談援助」「障害児保育」「人間関係」担当

所 属 学 会 等

名 称	活動期間	活動内容（役職等の活動を含む）
LD学会	平成15年4月～現在	大会参加・口頭発表
日本コミュニケーション 障害学会	平成17年4月～現在	大会参加・口頭発表
日本発達障害支援システ	平成21年4月～現在	大会参加・口頭発表

ム学会				
社会活動等				
名称	活動期間	活動内容		
埼玉県発達相談巡回指導員	平成22年4月～平成28年3月	羽生市における発達相談		
羽生市立新郷第二小学校関係者評価委員	平成25年3月～平成26年3月	小学校の外部評価委員		
担当教科目に関する資格・免許等				
名称	取得年月	取得機関		
保育士資格	平成14年3月	福岡県教育委員会(1214号)		
幼稚園教諭免許	平成14年3月	岡山県教育委員会(平13幼一種第0171号)		
研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
(学術論文)				
1. 機能性構音障害と読み書き障害との関連について	共	平成20年1月	国際医療福祉大学紀要 12巻2号p.35-p.41 (国際医療福祉大学)	機能性構音障害が治癒した群と持続している群の読み書きの問題や音韻処理能力について検討を行った。その結果、先行研究と異なり、読み書きの問題は構音障害が治癒した群に見られ、また音韻処理能力は治癒群と持続群を識別したり、また読み書きに問題のある群とない群を識別するものとはならず、対象児が構音障害以外に併せもつ発達障害に左右される結果となった。(浦由希子、田中裕美子)査読付き 筆頭執筆
2. 読み書き障害児に対する指導法の検討(博士論文)	単	平成21年9月	国際医療福祉大学大学院、学位論文	かなの読み書き能力を向上させるために、音韻意識の指導とトップダウン式指導を実施し、その効果を検討した。トップダウン式指導とは、熟語の読みや意味を強化する指導法である。音韻意識の指導では、音節の削除や逆唱課題を行った。対象は、小4から高1までの5名の読み書き障害児である。その結果、音韻意識の指導よりトップダウン式指導法の方が、かなの読み書きを伸ばすのに効果的であった。
3. 読み書き障害に関する文献研究	単	平成22年3月	埼玉純真短期大学研究論文集第3号 p.31-p.38 (埼玉純真短期大学)	読み書き障害について英語圏の研究や日本の研究を取り上げレビューを行った。英語圏では、読み書き障害の臨床特徴や原因、また指導法についてもほぼ一定の見解が得られている。一方日本における研究では、臨床特徴も様々であり、原因についても英語圏で言われているような音韻意識との関連は明らかではなく、今

<p>4 読み書き障害児に対するトップダウン式指導法の効果について</p>	<p>共</p>	<p>平成22年8月</p>	<p>日本コミュニケーション障害学 27 巻 2 号 p.87-p.94 (日本コミュニケーション障害学会)</p>	<p>後言語特性を踏まえた上での課題作成や解釈が必要と考えられた。</p> <p>かなの読み書き能力を向上させるために、音韻意識の指導とトップダウン式指導を実施し、その効果を検討した。トップダウン式指導とは、熟語の読みや意味を強化する指導法である。音韻意識の指導では、音節の削除や逆唱課題を行った。対象は、小4から高1までの5名の読み書き障害児である。その結果、音韻意識の指導よりトップダウン式指導の方が、かなの読み書きを伸ばすのに効果的であった。(浦由希子、遠藤重典、田中裕美子)査読付き筆頭執筆</p>
<p>5.学習やコミュニケーションに困難を抱える児童への支援—わくわくクラブの取り組み—</p>	<p>単</p>	<p>平成 23 年 3 月</p>	<p>埼玉純真短期大学研究論文集、第4号 p.11-p.15 (埼玉純真短期大学)</p>	<p>本研究では学習やコミュニケーションに困難を抱える児童に対し、学生が学習や社会性の指導を行った。対象児は小学1年から3年までの4名の児童である。支援期間は約3ヶ月間であり、週に1回支援を行った。内容は教科学習やゲーム、スポーツなどである。その結果、今回の取り組みが子どもに対して効果的であり、学生達も子どもの特性や対応方法が理解できたことが分かった。この理由として、週1回の定期的な支援、記録用紙の活用などが考えられた。</p>
<p>(その他) 助成金取得</p>	<p>単独</p>	<p>平成 18 年 7 月</p>	<p>平成 18 年度日本コミュニケーション障害学会研究助成金、日本コミュニケーション障害学会</p>	<p>タイトル「読み書き障害と構音障害との関連についての研究」</p>
<p>科学研究費取得</p>	<p>単独</p>	<p>平成 24 年 4 月</p>	<p>文部科学省科学研究助成金若手研究 (B)</p>	<p>タイトル：学習障害の読解の問題を予防するための指導法の効果に関する研究</p>
<p>その他 (表彰等)</p>				